

コタムンクアンの主を巡る言説の変容 : マレーシアの口承伝統における民間の歴史意識

著者	黒田 景子
雑誌名	鹿児島大学総合教育機構紀要
巻	2
ページ	17-40
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030673

コタムンクアンの主を巡る言説の変容； マレーシアの口承伝統における民間の歴史意識

黒田景子

要旨

マレーシアのクダーには歴史史料に登場しない情報を民衆が口承伝統として残している場合がある。近年クダーのマレー人ムスリムたちが自らの祖先の墓や歴史について古老の情報を残そうとし、それをマレー語のブログなどに公開する動きがある。特にタイ軍がクダーを攻撃占領した時期（1821-1842）は異教徒によるムスリムの支配時代の苦難と抵抗の時代としてクダーの村々で多くが伝承されている。本稿で扱うコタムンクアン村の伝承は南タイから戦乱を逃れてきたマレームスリム王族の一団がこの村を築城し住み着いていたが、1821年のタイ軍の攻撃で一族がほぼ殺害されたというものである。しかし、残った長男の直系子孫によって伝えられたその王名がナコンシータマラート国主のタイ語の欽賜名を持っていること、マレー語ではなく「シャム語」と彼らが呼んでいるタイ語の南タイ方言に類似した言語を話していたことがわかった。クダーには現在はマレー語教育が浸透して数少なくなっているが、「シャム語」起源の地名は多く、また現実にシャム語を日常語としている村々が少数ながら存在していて、クダーとタイの長い歴史関係を物語る。

ところが、この伝承がネットで公開されると熱心な支援者が現れ、独自の解釈をしてアユタヤ王朝は実はイスラーム王朝だった、その版図はインドの一部からマレー半島のマラッカ、ビルマの一部からフィリピンに至るという「奇説」に発展し、それを支持する人々が次々とネットで二次利用するようになった。マレーシアの歴史学会は歴史フォーラムを開いて独自の解釈をする情報提供者がよりどころとする歴史的資料である「クダー法」や「メロンマハーワンサ物語」から距離をおいて、「コタムンクアンの主」の「シャム語」話者ムスリム王についての発表を行ったが、現在も「アユタヤ朝最後の王はクダーに逃げてきてその子孫がいる。アユタヤ朝はイスラーム帝国だった」という言説がマレー語の Wikipedia に乗るまでになった。

なぜこのような説が熱心に支持されるのかを考察すると、歴史的に「シャム語」を話していた南タイからクダーに至る地域のムスリムが、1909年に英領マラヤに編入され分断されたことで、ムスリムの中のマイノリティとなり、かつて彼らが他者からサムサムと呼ばれ「敬虔ではないムスリム」と評された経験からマレー語話者ムスリムの中で「シャム語」を話すことを恥としたり、引け目を感じるアイデンティティの危機に陥っている現状が見えてきた。コタムンクアンの主アブ・バカル・シャーはクダーの歴史書に登場しない「シャム語」話者の「自らの歴史」に通じるものとして、過ちを検証されないまま民間での通説に成りかかっている。

キーワード：マレーシア、歴史、口承史料、クダー、シャム、

はじめに

前近代の東南アジア史研究における問題の一つは、現地語の文献資料が支配層の業績や反乱などの記述に偏り、地方史をカバーする情報がなかなか得られないことである。本稿ではマレーシアの、タイとの国境を接するクダー（Kedah）州における「歴史文献資料には記載されない」あ

る口伝伝承に注目し、それがいかなる現代的意味を付与されて広まっているか考察することを目的とする。

I. 背景としてのクダーの歴史事実について

1821年クダーはシャムのナコンシータマラート (Nakhon Si Thammarat) 軍の奇襲による攻撃を受けた。重臣や多くの民が殺害され、あるいは捕虜となってナコンシータマラートやバンコクに送られ、その後クダーは1842年までナコンシータマラートの直接統治下に置かれた。異教徒によるこの苦難と抵抗の時期をクダーのムスリム達は「プラン・ムソビシ (Perang Musuh Bisik- 敵の来襲を囁く戦争)」と呼ぶ。

この「プラン・ムソビシ (1821-1842)」についての先行研究は、ペナンの英国東インド会社 (EIC) の元に逃れた当時のクダースルタンの処遇を巡る EIC の対応、あるいはスルタンの親族が1831年と1838-39年に起こした反シャム大乱について述べたものに偏っている。同時代の詳細で豊富な EIC 資料がそれを可能にしている¹。

しかしながらその一方で EIC が興味を示さなかった戦争下のクダーの農民の状況や交易と関わる沿岸部以外の状況についてはほとんど記録がない。各村落における「プラン・ムソビシ」の記憶は、この戦いでシャム兵に抵抗した地元出身の英雄譚として、あるいは、自らの祖先に関わるものとして古老や子孫により口伝で語り継がれている。個々の村における伝承などは時折マレーシアの研究者による論文としてマレー語で発表されることがあったが、クダーの歴史書ではそれらに言及されることは殆ど無かった。

しかし2000年代以降民間の人々によってそれらの「伝説」や「記憶」を積極的に残そうとする動きが生じている。若年層中心に、自らの祖先や王族のものと見られる墓や遺跡を調査し、古老に歴史を聞いて記録するという活動が見られる。そして、それを可能にしたのはインターネットの普及による情報の収集と拡散である。マレーシアは東南アジアではシンガポールと同じく早い時期に民間のインターネット利用が進んだ²。現在のマレー語はローマ字アルファベットで表記されるため、タイや日本のような独自のフォント開発が不要であったことも早期のネット使用を容易にした。さらにマレーシアは英領マラヤ時代の影響で英国と繋がるコモンウェルス国家連合の一員である。留学や仕事で英語を使う頻度も多く、ネット上でも英語、マレー語を使った情報交換が盛んである。

その結果、人々がネット上のフォーラムやブログを利用し、情報は農村部からも発信され、自らの祖先につながる話題が公開されるとそれに対して人々がまじめに対応するという文化ができあがった。マレーシアは人種暴動を影響した経験から、あからさまな政治批判やいわゆる「ネット荒し」行為は刑法による処罰もある。それ故か社会的抑制が効いて、村の話題、行事、祖先の記憶などについてまじめな論議がされている。そして、互いに思わぬところで縁者を発見することもある。

伝説などの「歴史書には載っていない歴史」という情報には、後述するように非常に危うい情報もある。しかし、研究者でない人々が今まで口をつぐんでいた、あるいは公表するすべが無

¹ たとえば Boney 1971. Gullick 1983.

² 会津によれば2000年のデータ分析では、アジアの人口あたりのインターネット使用普及率を一人あたりの GDP で割った指数では、韓国、ニュージーランド、台湾、オーストラリアをトップとして、香港、マレーシア、シンガポールが続き、むしろ日本はこの時点でかなり立ち後れている。日本やタイなどの独自の文字システムをもつ国はローマ字アルファベットで英語やマレー語が表記できる国よりも、さらに技術の面での遅れがあった。早くから多言語環境を造っていた Macintosh と異なり、Windows が多言語対応のネット表記できるようになったのは Windows2000以降である。[会津 2001:70-71]

かった知見を述べることは、歴史的事実の真偽はともかくとして「生きる歴史実践」といえるのではないだろうか。

本稿では始まりの「ものがたり」からそれが時系列的にどのように広がっていったか、それが「暴走」とでもいうべき突飛な語りになっていく、その背景についても考察したいと思う。

II. コタムンクアンの伝説の再発見

1. コタムンクアン村とクバンパス村の「シャム語」話者村 Thai-speaking Muslim 調査

(1) 1991年のコタムンクアンの短期調査

クダーの州都アロースターから北部のタイ国境ブキット・カユ・ヒタムに至る高速道路はそのまま国境を越えて、タイ南部のソクラーに至る。この道は元名サイブリー道路といい、クダーがシャムに朝貢するために用いた公道でもあり、タイではクダーのことをいまでも Saiburi と呼ぶのでタイ側の表記はサイブリー街道である。このサイブリー街道の途中の複数の町の名はタイ語由来のものが見られる。クダー全体においてもタイ語由来の地名はかなり多いのだが、クダー州の大多数の住民はマレー語話者のマレー人ムスリムである。

ジトラ (Jitra) の街の東側のパダントラップ川沿いに10kmほど入ったところにコタムンクアン (Kota Mengkuang) という村がある。著者は1991年にこの村で歴史に関する聞き取り調査をおこなったが、老婦人83才の語る村の歴史とは「昔、ルゴル (ナコンシータマラート) が攻めてきて、村人を捕まえて殺し、捕虜にした者は耳たぶに穴をあけてひもでつなぎ、シャムまで連れて行った。後にそこから逃げてきた人達が集まって、今の村を作り直した」というものであった。1991年当時この村の人々はマレー語のクダー方言を話していたが、老婦人によれば20世紀の前半までは村人はみなシャム語 (Bahasa Siam) を理解し、シャムの料理も作っていたという [Tok Som binti Kasim, 83才、1991年の著者による聞き取り]。また後述するクバンパス村での聞き取り調査で周辺の言語使用状況について調べるとコタムンクアン村も20世紀中頃までは「シャム語の会話を理解できる」村の一つであったと思われた [Kuroda 1992]。

コタムンクアン村は、地名からも「シャム語」との関係をもつことがわかる。村の中央には土の採取でかなり崩れた丘があり、以前はそこが王族の居城 (Kota) であったと聞いていた。また、「Mengkuang」についても、「ムンクアン (タコノキ) の木が生えていた」という説と「シャム語」で「Muang Kuwang (広い土地)」という意味だ」と聞かされた。また隣村にルゴル (Lugor) の姫の物語を核とした伝統芸能メックムロン (Mek Melong) が伝わって村人によって演じ続けられているということなどから、この村がナコンシータマラート (ルゴル) と関わりがある地域だということに確信を得た。

(2) 1991年のクバンパス村の「シャム語」話者村調査

コタムンクアン村で「いまでもシャム語³を話している他のムスリムの村がある」という情報を得て、同年その村落での滞在調査を行った。老婦人のいう「シャム語を話すマレームスリム」とは、クダーが英領マラヤに編入された際1911年に行った最初のセンサスでマレー人の Sub-Race として「サムサム (Samsam)」と呼ばれた人々のことである。1911年の統計においてはクダーの人口の81%がマレー人であり、サムサムはさらにその中の7%に過ぎなかったが、1991年においても日常言語が「シャム語」のムスリム集落が存在し、クダー北部のクバンパス地区と

³「シャム語」とは言語学でいう tai 語の一種である。マレーシアの Thai-speaker はムスリムと Malaysian Siamese の場合がある。本稿では彼ら自身が Thai 語と呼ばれることに抵抗を覚え、タイ国人と区別したがる理由から「シャム語」「シャム語話者」と記す。

東部内陸のプンダン（Pendang）地区に「シャム語」話者ムスリム村落が集まっていることを調査によって確かめることができた〔黒田 1995:46〕。

1991年段階での調査地クバンパス村では村の起源は200年程前の南タイからの移住であると語られていた。アユタヤ朝の崩壊（1767）からトンブリー朝をへてラタナコーシン朝の始めの時期である。他の村でも、ほぼ同じような答えが得られた。

クバンパス村民の言語使用世代別調査では30才以上では日常語としてシャム語を話す者、会話が理解できる者が人口の84%を占めていたが、20代から以下になると同じ家族で食事をしていても祖父母の「シャム語」がわからない孫が増え、親世代が「シャム語」とマレー語を仲介しつつ話している図が世帯の通常生活であると判明した。

若い世代が「シャム語」を使わなくなった理由はマレーシアの社会状況とマレー語教育環境の変化によるものである。著者は村の世代交替により約30年後の2020年前後頃にはシャム語話者は60才以上のみになっていくだろうと推測しており、数的調査はその後行っていないが、この10数年訪問する度に推測通りの「シャム語」話者の減少を耳にしている。

1991年には人々の協力によって「1991年現在もシャム語を使用する村」「50年程前にはシャム語を理解した」と言われる村の分布図を作成した。「シャム語」話者村落の分布はクダーの北部クバンパス村の周辺とクダー中央の内陸丘陵部の沼地に当たるプンダン（Pendang）地区に特徴的に分布している。特にプンダンではもうひとつの「シャム語」話者上座仏教徒の「Malaysian Siamese」つまりマレーシア国籍のシャム人の村落と近接し、嘗て互いに行事に参加するという親密な交流があった。両者が袂を分かったのは、マレーシアが独立後イスラームを国教とし、ムスリム優先の社会潮流とイスラーム革命の影響により「非イスラーム的」な事柄がほぼすべて、クダーの伝統芸能に至るまで上演することが遠慮されるようになり、マレー農村の人々が「正しいイスラーム実践」に興味を持ったことによるものである〔黒田1995:51〕

2. コタムンクアンのシャリフ・アブ・バカール・シャー（Sharif Abu Bakar Shah）についての「史実」検討

(1) コタムンクアンに関するネット情報の始まり

ネット情報からできるだけ他者に影響されない情報を入手するには、初期の議論をフォローする必要がある。コタムンクアンについてはまず最初にマレーシアのマレー語紙の電子版である Utusan Online の2007年2月13日の記事においてナイ・ロン・カシム・ナイ・ロン・アフマッド（Nai Long Kasim Nai Long Ahmad）（1937-2012）⁴がクダーは歴史家のいう1136年起源ではなく国名や場所の名は「シャム語」由来であると語った。また祖父からの口伝として、アユタヤ末期にリゴールからやってきたチャオ・ピヤ・シータマラート（Cao Piya Si Tamarat）という称号をもったムスリム王がコタムンクアンに城を作って居住し、シャリフ・アブ・バカール・シャーとして知られたという。そしてナイ・ロン・カシム自身はその直系子孫であると宣言した。さらにその後すぐに別のブログに寄稿し、歴史的資料である『Undang Undang Kedah（クダー法令集）』の近年の発行（2005）の中の条文について独自の解釈をし、フィリピンやカンボジアを含む多くの地域は「シャム語（Bahasa Siam）」と関係があり、アユタヤ朝は「シャム・イスラーム」の王朝であると断言した〔Kewujudan Kedah bukan pada 1136 Masihi? 2018年6月25日閲覧〕

2007年3月9日には「失われた城の謎：コタムンクアン」と題したマレー語ブログ記事が登場

⁴ 彼が称する名は YM Tuanku Nai Long Kassim ibni Tuanku Nai Long Ahmad であるが字数の関係でナイ・ロン・カシムと表記する。

した [naim-firdausi 2007]⁵。コタムンクアンにあった城は一度も歴史書に記録されたことがない。90才の老翁は「城はかつてあったがその存在は隠されていた」と述べた。さらに69才の村人は「幼いころ廃墟になった城をみたことがあるが、1963年、河川交通に代わる道路建設のための用土としてこの城の土が使われてしまった」と述べた。

以上がきっかけとなり、この話題にクダールの民の注目が集まった。特にこの2月のナイ・ロン・カシムの話に感銘を受けたというハンドル名アナイアナイ (anaianai) は熱心な論者である。彼はナイ・ロン・カシムから情報を収集し、それに基づいた独自の考察を加え、特に「アユタヤ朝は最初からシャム人ムスリム王の支配するイスラーム帝国であった」という説にこだわり、ブログ「シャムイスラーム帝国 (Empayer Islam Benua Siam Kedah)」というブログを作って、自説を掲載していくようになる。

その他にもその内容を転載した他のブログや、親族や、同じ「シャム語話者マレームスリム」である人々からの共感や新たな情報などのコメントが寄せられ話題は膨らんでいった。しかし短期間にその内容は事実の誤認や史実と思われる情報をはるかに逸脱し、暴走あるいは妄想とでもいう領域にまで展開してしまった。

しかしながら、コタムンクアンについての伝承は全くの虚言であるとは断定できない。最初に述べたようにクダール史において「欠落している」村落史情報として興味深い要素があるからだ。

2007年11月1日にマレーシア歴史学会クダール支部では「Sejarah Kedah - Antara Imaginasi dan Realiti (クダール史: 想像と事実の間)」というテーマでフォーラムを開いた。ネットでの話題の盛り上がりとその方向性に学会として危惧をいだいたと思われる。さらに2009年9月15日に再びフォーラムを開いてそこでハリム・アサディ (Halim Asadi) による研究発表と冊子が配付され、そこではコタムンクアンとその主シャリフ・アブ・バカール・シャー (Syarif Abu Bakar Shah) についての民間伝承情報から学術的な情報分析が発表された [Hamli Asadi 2009]。

(3) コタムンクアンのシャリフ・アブ・バカール・シャー

ハマリ・アサディのまとめたものはタイ語の史料との比較が不十分で、アユタヤ末期のナコンシータマラートの事情についての史実には若干の混乱がある。とはいえ、まずハマリ・アサディの冊子に基づいて以下簡略に記す。

シャム・アユタヤ朝の陥落時、シャリフ・アブ・バカール・シャーはリゴール (ナコンシータマラート) にいて独立を宣言した。しかしその後、新王朝を建てたタイ軍の攻撃により、南下逃亡し、ジャングルや丘を通過してクダールのクバンパス地区のジトラ (Jitra) 方面に40頭の騎象部隊と兵士をつれて現れた。そして良い場所をみつけて兵士に命じて一週間で城を建て、そこにコタムンクアン (Kota Mengkuang) と命名した城を造り、軍隊の演習場を造り、街をつくった。彼らについてきた人々はさらに南下してプンダン地区トゥアラン (Tualang) に村を作った。

しかし、1821年にナコンシータマラート軍がクダールを奇襲占領したとき、コタムンクアンも襲われ、シャリフ・アブ・バカール・シャーとその妃、そこに居なかった長男を除く王族全員が殺され、遺骸は敵に首を持ち去られないように様々な場所に隠された。シャリフ・アブ・バカール・シャーの墓はトゥアラン村にある。村の人々も大勢が殺され、または捕虜になってナコンシータマラートやバンコクへ送られた [Hamli Asadi 2009]。

⁵ log naim_firdausi (<http://ttuyup.wordpress.com/2007/03/09/misteri-kota-kota-yang-hilang-kota-mengkuang/> 2007/10/20閲覧:2018年には既にブログが閉鎖されている。筆者は閲覧時に Web ページを Pdf の形で保存している。このブログが閉鎖されたのはブログ主の海外移転に伴うものである。現在は <http://firdausi54.rssing.com/chan-6056211/latest.php> に移転復活している2018/10/31

複数のブログ記事情報で信憑性の高いものと上記の情報からの分析によると、このコタムンクアンに住み着いた王族はチャオ・ピヤ・シー・タマラート (Cao Piya Si Thammarat) の称号をもっていた。これはナコンシータマラート国主 (Cao Phraya (Nakhon) Si Thammarat) のタイ語の欽賜名である。一方タイ語史料で確認できるのはナコンシータマラートではアユタヤ末期に国主が騎象軍を率いて陸路をアユタヤに向かったまま帰らず行方不明になり [Stuart 2001:168] [Krom Simrapaakon 1963]、アユタヤ崩壊が明らかになった直後 ナコンシータマラート城の留守居役の副官のヌー (Nuu) がナコンシータマラートの周りの港市を軍を派遣して従え、自らの交易ネットワークとして押さえて自立宣言をしたという史実である。その後、トンブリーにタイ人王朝を復活させたタークシン (Taksin) 王がナコンシータマラートに遠征してヌーを捕らえたが後に解放してナコンシータマラートの国主に戻し、その後ナコンシータマラート国主はヌーの女婿パット (Phat)、パットの息子で「タークシン王の息子」と言われたノイ (Noi) に国主を継がせる世襲国主になった。

ナコンシータマラートはシャムの南部の軍事と交易の重要拠点である。シャムの王権の基盤である上座仏教の寺院が多く存在する。ナコンシータマラートの国主はしばしば中央から派遣され、アユタヤ朝下ではかならずしも世襲制ではない。しかも17世紀にはムスリムが国主になった時期が幾度かありモスクも存在する。故にこのアユタヤ最後の国主と思われるチャオ・ピヤ・シー・タマラートがムスリムであっても矛盾しない。

さて、このチャオ・ピヤ・シー・タマラートの一族は何語を話していただろうか。まず、アユタヤ宮廷から派遣される国主や、周辺のより格の低い地方国の国主の子弟は若いうちにアユタヤ宮廷でマハートレック (Mahatlek= 王宮の小姓) として宮廷で奉仕し、宮廷でタイ語や儀式礼儀作法を学んだ。そしてその後ナコンシータマラートへの派遣、あるいは帰国先のナコンシータマラートではタイ語の南タイ方言が話されている。これに類似した言語がクダーでいう「シャム語」である。この「シャム語」の中にはマレー語からの借用語が混じり合っている。言語学的には「Tai 語」の南タイ方言の亜種に分類されると思われる。しかし、現在のマレーシアではタイ国籍人の南タイ方言と区別して「シャム語」と呼ぶ。彼ら自身も「シャム語 (Bahasa Siam)」と呼んで「タイ語 (Bahasa Thai)」と区別している。

ここで「史実」の整理をおこなう。

アユタヤ朝最後のナコンシータマラート国主はビルマ軍に追われて南下し、おそらくは同じくビルマ軍の侵入から逃れた、ナコンシータマラートからパタルン (Phattalung)、ソングラー (Songkhla) の一般農民の避難民「シャム語」を話す人々などと共にクダーに至り、コタムンクアンに城を築いてシャリフ・アブ・バカル・シャーとしてムスリムの王として知られた。そして、1821年の「プラン・ムソビシ」で長男を除く全員が殺され滅んだ。

以上が伝承情報を学術的に整理し、タイの史料と比較検討して得られる仮説である。

また、この説はクバンパスとプンダンに「シャム語」話者の村落が特徴的に集まっていることを説明する。

2. 『ウンダン・ウンダン・クダー (Undang-Undang Kedah = クダー法令集)』と『ヒカヤット・メロンマハーワンサ (Hikayat Merong Maha wangsa- メロンマハーワンサ物語)』

歴史の基本常識としてシャムのアユタヤ朝はイスラーム政権ではない。しかし本稿において「アユタヤ朝イスラーム論」者がよく引用し根拠としてあげるのが2005年発刊の『ウンダン・ウンダン・クダー』と『ヒカヤット・メロン・マハーワンサ』である。いずれもクダーの古典史料であるが、学術的議論の論拠とするには慎重であるべき点の特徴である。以下簡略に述べる。

(1) 『ウンダン・ウンダン・クダーはクダー』の古典的文書で、ジャウイー (Jawi) 文字で書かれ、

いくつかの写本があることが知られている。そのうち、19世紀に英国に持ち帰られたジャウイー文字写本はロンドンのSOASにMS 40329として保管され、かつて「Kedah Law」としてウィンステッドによって翻訳された[Winsted 1928]。それが近年マイクロフィルムコピーとしてマレーシアに戻り、マリヤム・サリム (Mariyam Salim) によってローマ字化作業の後に出版された [mariyam 2005]。この写本の成立年は1650年6月17日であるとされている [Adi Yasin 2012]

『ウンダン・ウンダン・クダー』はマレー国家の初期に実施されていたイスラム法の影響を受け始めた慣習法であるがまだ写本に異論があり、研究は尽くされているとは言いがたい。また、記述の一部にタイ語をジャウイー文字表記したものがあるが、タイ語とマレー語は本来全く異なる音韻体系であるため、マリヤムの版でも解読できないままジャウイー表記が残されている部分がある。

(2) 『ヒカヤット・メロン・マハーワンサ』

クダーの歴史物語として扱われることが多い史料である。ウィンステッドがこれを翻訳して「Kedah Annals」として1938年に発表している [Winsted 1938]。空想的な部分を含むため、史料批判無く使用するには問題がある。その冒頭部分は、Rum (ローマ) 出身のラジャ・メロン・マハーワンサ (Raja Merong Mahawangsa) が中国へ向かう船旅の途中、ガルダ (迦陵頻伽) に襲われ、途中寄港した地にランカスカ (Langkasuka) の国を作ったと始まる。彼は息子のメロン・マハー・ポディサット (Merong Maha Pudisat) が王になった後にローマに戻った。ランカスカはその名前をクダ・ザミン・トゥランに変更した。これがクダー王国の始まりとする。

この書によれば、クダーのラジャがイスラームに改宗したのは1136年であるとされる。それまではヒンドゥーあるいは仏教文化を受容していたと考えられる。ただし、アチュの史料によればクダーがイスラーム化したのは15世紀半ばとされるために、クダー政権のイスラーム化は15世紀半ばという説が主流である。

このヒカヤットが書かれた年代は不明である。ウィンステッドはこれを1612年ころのものでないかと言うが、疑義も多い。さらに、1821年にナコンシータマラート軍がクダーに侵入占領したときに、焼失させたという説もあり、オリジナルは不明である。

この2つのクダーの古典の学術資料としての使用について研究者は慎重に取り扱ってきたが、マリヤムの『ウンダン・ウンダン・クダー』が2005年に出版され、大衆に入手しやすくなったことがクダーの歴史好きの人々には好まれた。本稿で述べるコタムンクアンの主シャリフ・アブ・バカル・シャーについても、この2つの中の表現を論拠として主張する部分が多々でてくる。

Ⅲ. 物語の暴走

1. ナイ・ロン・カシムの主張

「Utusan Malaysia Online」での2007年2月の記事の後、ナイ・ロン・カシムはその年の3月9日付けの「Blog naim_firdausi」の取材で、クダーの歴史について次のような見解をのべた。

「西側の学者によって書かれたクダーの歴史は偏向しており、植民地主義者に有利になっている。『ヒカヤット・メロン・マハーワンサ』は1821年の敵の攻撃で焼かれてしまい、英国人によって「伝説の物語」として書き直され、歴史史料としては顧みられない。タイ国の帝国主義支配の中でクダーの歴史的記録は残されなかった。(中略) クダー人の書く歴史は全く許されなかったため、私の父トゥンク・ナイ・ロン・アフマッド (Tengku Nai Long Ahmad) はイスラームのシャム王の子孫を絶滅させようとして殺された。だからこそ、植民地時代に生きた私の祖父トゥンク・ナイ・ムハマッド (Tengku Nai Mahmud) は私に歴史を語り、決して紙に書いて残そうとはしなかった [http://naim-firdausi.blogspot.com/2007/05/kedah-dalam-empayar-siam-shari-

nuwi.html、2018年6月25日閲覧]】。

以下、ナイ・ロン・カシムの認識では

- (1) ▲クダー (Kedah) の国名はシャム語の紙 (kradat) が語源である。それはただの紙ではなく『ヒカヤット・メロン・マハーワンサ (以下 HMMW と略)』でクダーの国を作るための委任状として示された紙のことである。
- (2) ▲HMMW がタイ人の軍隊によって焼却されたのはそこに「シャムの国」がクダー王によって開かれたと書いてあったからである。●メロン・マハーワンサ王はシャムの王であり、クダーの王である。(HMMW ではメロン・マハーワンサ王の孫にあたる長子がシャム王、次子がペラ王、末子がパタニ王になったという説がある。)
- (3) 多くの地名がシャム語から起源している。▲その理由はそれがクダー帝国版図 (Siam Kedah Kheang Tesh) からきているからである。
- (4) ●「シャム」の国と王は本当はイスラーム教徒である。アユタヤにはモスクを改装して寺 (Wat) にした跡がある。
- (5) 「シャム語」を話すマレー半島北部のマレー族は実際は「シャム民族」である。
- (6) 祖父の話ではスルタン・シャリフ・シャー・チャオ・ピヤ・シータマラート (Sultan Syarif Syah Cau Pija Si Thammarat) という名前のシャム王がいて、1767年にビルマがアユタヤを攻撃したときにナコンシータマラートに移ってその王ラジャ・リゴール (Raja Ligor) となった。アユティヤ・シャリ・ヌウィー (Ayuthiya Shari Nuwi) のシャムの最後の王といわれた。
- (7) ●その後ムクタル・フセイン (Mukhtar Husein) というシャムの将軍が、イスラームから離脱して、名前をプラヤー・タークシン (Phraya Thaksin) に変え、シャムのナコンシータマラートを攻撃し始めた。
- (8) スルタン・シャリフ・シャー・チャオ・ピヤ・シータマラートは逃れて、象25頭 (象の頭数については25, 40, 50と異同がある) と兵士をつれて (南下し)、クランタンの地にしばしとどまり、それからコタムンクアンの場所にやってきてそこに新たに城 (Kota) を作って軍隊の演習場まで作った。
- (9) 1821年ナコンナコンシータマラート軍がクダーを攻撃占領した時にスルタン・シャリフ・シャー・チャオ・ピヤ・シータマラートは殺された。王と王妃と子弟の墓はトゥアラン村やその他の場所にある。
- (10) 植民地主義者 (タイのラーマ5世のこと) は (クダー南部の) クアラムダーの「地域スルタン (Seni Sultan)」をクダー国のスルタンに任命した。(スルタン・アブドゥル・ハミッド・ハリム・シャー = Sultan Abdul Hamid Halim Shah がタイによってクダースルタンと承認されたことを指す)。

これは彼の主張の一部である。彼の話には史実とそうではない事柄が混じり合っており、貴重な情報もあるものの、すべてを受け入れるには疑問がある。著者の判断で史実ではないものには●、疑問が残るものには▲をつけた。以下についても同様である。

この時点でナイ・ロン・カシムはスルタン・シャリフ・シャー・チャオ・ピヤ・シータマラートをシャリフ・アブ・バカール・シャーであるとは言っていない。また、ナイ・ロン・カシムには植民地主義者、つまり英国とタイ国の両国によってクダーが翻弄されたという思いがあったことが読み取れる。

ナイ・ロン・カシムの主張は人々の興味を引いた。この後アナイアナイが「トゥンク・ナイ・ロン・カシム」(トゥンクとは王族の称号である) と自分の説を述べる場として「Empayer Islam Benua Siam Kedah (シャムイスラーム帝国クダー)」というブログを新たに作り、大量の記事を載せるようになった。

ではそのブログではどのような展開が見られたのか。

2. ブログ「Empayer Islam Benua Siam Kedah」の言説

ブログ主のアナイアナイはプロフィールでは、技術系大学の講師であり、東南アジア史研究は趣味であるとする。このブログの記事にはナイ・ロン・カシムの代弁としてアップロードされたものもあるが、ほとんどはアナイアナイ自身の見解である。ブログの意味は「シャム・イスラーム帝国クダー」で2007年4月7日に始まり、ナイ・ロン・カシムの情報、クダー法 (UUK)、HMMW に関連する記事を集中的に乗せて2007年には139記事になった。その後はペースが落ちて2014年9月に更新されなくなるまで少数を載せるのみである。

彼の主張の最初のもは2007年4月7日のものである [http://sejarahnagarakedah.blogspot.com/2007/04/50-tahun-merdeka-tapi-butu-sejarah.html 2018年6月25日閲覧]。彼の基礎的歴史認識を示すもので、かいつまんで記す。

- (1) スルタン・シャリフ・シャー・チャオ・ピヤ・シー・タマラートはシャリフ・アブ・バカル・シャーである。
- (2) ●シャムはイスラム教徒、タイは仏教徒である。
- (3) ●マレー人はシャム族であり、その起源は帝国の第一大陸のアユティア王朝からきている。この帝国はインドの一部を含むマレー半島とチャンパをカバーしている。(マレーシアの学校では、タイ人は雲南から南下し、マレー人はチャンパから来たと教わる)
- (4) UUK には「古い時代の王のことで、シャム王国の王たちの称号はシャム語で Cau Phraya Kersan という」とある [UUK 2006: 36]。▲(著者注記、アユタヤ中央宮廷の王ではない。Kersan の意味は不明。アナイアナイは「Ke San」であり、「シャム語」による「第3」という解釈をしている。「Ke」はマレー語、「San」はタイ語である。)
- (5) ●1350年に王国となる前、アユティア政府は、クダーのスルタン制を取っていた。彼らの祖先は中国からやってきて、クアラムダー (Kuala Muda = クダー南部) に都市を造った。王子と彼の随行者は Wong Serah Warrants (Mahawangsa) 王子の頭で、唐王朝の Sai Tee Sung の孫である。HMMW を参照。

(中略)

- (6) ●第11代の、スルタン・ムザファル・シャー III (Sultan Madzafar Syah III) がアユタヤ王のラーマティボディ I (Rama Tibodi I) であり、シェイク・アフマッド・コーミ (Sheikh Ahmad Qoumi) として知られている。彼がアユタヤ・パサイ・マの最初のシャム皇帝である。
- (7) ●シャムイスラーム帝国の第二代目はナレスアン (Naresuan) 王でアチェのラトゥ・イマン (Ratu Iman) と結婚した。
- (8) 英国の植民者たちは私たちが欺いてタイと交渉し我々の文明をタイに引き渡した (1909年の条約のことだろう)。彼らは歴史的事実を歪め、タイとシャムは同じだという。英国人は私たちのアユタヤ文明をタイのものとし、イスラームという要素を抜き取り、半島に植民地を作り、錫、金、香辛料などの作物を集めた。世に知られる歴史は彼らの作った歴史であり、私たちの歴史ではない。

この記事と同日に A.M. マズラン (A.M.Mazlan) が「クダー国とアユタヤのシャム人ムスリム王」と題する小論文を他のサイト「Sangtawal sakranta」にも投稿している [http://sejarahnagarakedah.blogspot.com/2007/04/historical-reality-muslims-kings-of.html 2018年6月25日閲覧]。A.M. マズラン はアナイアナイと同人物の可能性があり、同様の説を主張する。

これらアナイアナイの説についてはコメント欄では論文の主旨「自らで自らの歴史を書き直す」についての賛同が得られた。

自国による歴史の書き直しをという主旨はともかく、アナニアの説には明らかな事実誤認や、論拠の明らかでない主張が混じっており、自国自身の歴史をと言いながら D.G.E ホールの「A History of South-East Asia」(1955)に基づいていることを強調するという矛盾した心理が見られる。

以後、アナニアの投稿は同様の歴史観にもとづいた内容の記述が続くが、2007年4月27日に彼はシャムイスラーム帝国のクダーパサイ・マ王の系譜「Salasilah Empayar Benua Islam Siam Ayuthia, Nagara Kedah Pasai Ma」を発表する [http://sejarahnagarakedah.blogspot.com/2007/04/empayar-benua-islam-siam-ayuthia-nagara.html2018年6月25日閲覧]。そこにはアユタヤのウトン (Uthong) 王 (1300-1369: 原文ママ) をスルタン・マッド・ザファール・シャー III (Sultan Mad Zafar Syah III) と同一人物とみなし、以降のほぼすべてのアユタヤ王をイスラーム王として称号を付した。その結果、アユタヤの王は同時にペラの王であり、マラッカ王であり、インドのアユタヤの王でありモンゴルの子孫であり、リアウの王であり、ともはや理解しがたい系譜が誕生した。この中で検討に値するのはナイ・ロン・カシムから聞き取りを受けたコタムンクアンのシャリフ・アブ・バカル・シャー (-1821) から以降でナイ・ロン・カシムが直系8代目にあたるという部分のみであろう。

なぜこのような系譜になったかといえば、本来ならば「シャム」と「イスラーム」の共通要素をもつ部分のみを抽出すべきところを、そのどちらかの要素をもった王をすべて「シャムイスラーム帝国」に詰め込んでしまったが故であると思われる。従って「シャムイスラーム帝国」の版図もインドからフィリピン、オーストラリアの一部にまで及ぶことになり、コメント欄で失笑を買う場面もみられた。

その後彼の説はさらに「暴走」するようになり、

- (1) ●ラーマティボディ II (在位1492-1529) はシャム・イスラーム皇帝 Tunku Muhammad Yusuf ibni Sultan Rijarrudin Muhammad Johan Syah (Raja Pasai) である。
- (2) ●ビルマはイスラームの拡大を防ぐために「シャムイスラーム帝国 (アユタヤ朝を指す)」を攻撃した。
- (3) スルタン・マッド・ザファール・シャー III は地方によって異なる名前で知られ、トレンガヌ碑文では Raja Man da li ka として名前が記されていた。この碑文は18世紀に地元の賢人たちがイスラームの証拠を破壊しようとするタイ軍から碑文を隠すために川に投じたものである⁶。
- (4) ●スルタン・マッド・ザファール・シャー III の別の名は Sheik Ahmad Qoumi である。なぜなら Cao Phya Racha Yok というシャムの王のみに使う称号をもっているからであり、王と別人という歴史家の主張は間違いである。(シェイク・アフマッド・コーミは17世紀にアユタヤにやってきたペルシャ人商人で、その後、アユタヤ朝の高官になった。その子孫は仏教に熱心なボロマコット王の時に勧めにより仏教徒に改宗し、ブンナーク家として現在のラタナコーシン朝下でも有力な名家である。)
- (5) ●UUK の記述とアユタヤがイスラーム国であるという主張からラーマティボディ III 世 (ナライ王 = Narai 王) はアチェのイスカンダールシャーである。
- (6) ●クダーに現在仏教徒シャム人がいるのはスルタン・アブドゥル・ハミッド・ハリム・シャー (1881-1943) がタイのラーマ V 世と親しく、タイのスパイが棲みついたからである。
- (7) スルタン・アブドゥル・ハミッド・ハリム・シャーのタイ人妻 (Che Menjalara) との結婚

⁶ 史実としてのトレンガヌ碑文は Jawi 文字で書かれた初めての碑文として有名で1303年のものとされている。この碑文は1887年にトレンガヌの Hulu Terengganu の Kuala Berang での洪水の後に発見されてトレンガヌのスルタンに献上された。

以前はクダーにはワット（上座仏教寺院）はなかった。

- (8) ● HMMW でメロンマハワンサの歴史はヒンドゥーと言われているが、ローマ（Rum）からクダへ向かう前はイスラム教徒であった。

上記のような内容は少し東南アジア史を読めば妄言と断定されるであろう。このような投稿についてはほとんどコメントがつかなかった。

アナニアナイは自らの研究の立ち位置について、英語とマレー語では2007年5月29日に答えている。

すなわち、

- (1) きっかけになったのは、トゥアंक・ナイ・ロン・カシム（Tuanku Nai Long Kassim）というタイ人ではないがシャム語を話すシャム人ムスリムの「シャリフ・アブ・バカール・シャーの相続人」に出会ったときである。たとえ文字が消えても、シャム語で話している人が現実にいる。
- (2) シャム語とタイ語は全く違うものである。
- (3) 植民地史観ではなく私たち自身の目でマレー人種自身のアイデンティティであるイスラームの発展を通じて、私たちの眼鏡から私たちの国の歴史を見直す必要がある。
- (4) タイの侵略者は邪悪である。彼らは私たちの文明を乗っ取ったのであり、彼らはシャム人であると告白しているが、実はタイの仏教徒である。
- (5) なお、ブログに載せている記事にはマレーシアの政党やそのほかの政党との関連性はない。真実を明らかにしたいだけである。

では、このブログのナイ・ロン・カシム とアナニアナイの記事はどのように読み手に影響を与えたのであろうか。

3. クダー史研究への影響、賛同と反論

インターネットが一般に使用されるようになる前であったならば、ナイ・ロン・カシムが祖父から聞いた昔語りはその村か親族の間だけで共有される話であり続けたであろう。それがネットのブログ、あるいは個人的なメールで情報の拡散や情報提供者とであう機会を作ったことはクダー史研究に一石を投じた。

この「Empayer Islam Benua Siam Kedah」に一定の読者がいたことは間違い無い。2008年からは他のブログ、たとえば「Srikandeh」「Sejarah Realiti Kedah」⁷などのマレー語ブログにコタムンクアンのシャリフ・アブ・バカール・シャーというシャム語を話すムスリム王についての記事の転載や紹介が見られるようになる。ほとんどのブログは誇大妄想気味の部分ではなく、クダーの地方史情報としてのシャリフ・アブ・バカール・シャーの存在に興味を示した。評価としては、クダー史で明らかになっていない歴史を明らかにするのは良いことである、植民地支配ではない自らの史観をもつべきである、という部分で賛同しているが、史料の吟味、特にアナニアナイが頑固に主張している UUK や HMMW の解釈について検討する意見は見られない。

そのかわり、ブログによせられたコメントや他の投稿の中に、このような形であるからこそその興味深い情報が寄せられた。

⁷ 確認出来たのは「THEMALAYPRESS」「Radio Amatur Changlong」「Cominity Forums -al-Fikrah.net」「Minda Ahad」「Melayu Nusantara Menbongkar kehebatan Tamadun melayu」「atok fabregas」「Sejarah realiti Silat Cekak」「keluarga tok nai din」「Berkat Ayahnda」「orang kedah」などであり、いまなお他に増殖しつづけている。アドレスは参考文献を参照。

(1) スパイに怯えるクダーの人々の話題

「本当のクダーの歴史はタイのスパイがいるから話すことができなかった。コタムンクアンのシャムイスラーム王は1812年にタラーン（プーケットの古名）を攻撃しているがそのことに関してクダーの都にいたアロースターのスルタンは沈黙していた。」2007年4月23日、Pak long Soda 投稿 [http://sejarahnagarakedah.blogspot.com/2007/04/masih-ada-yang-ingat-sejarah-bangsa.html2018年6月25日閲覧]。

「祖父の Wan によると、タイの支配時代（これは日本軍が英領マラヤに侵攻し、タイにクダー、トレンガヌ、クランタンを与えた1939-1945年の話かもしれない）村人すべてが恐怖のために隠れ住んでいた。そのとき祖父の家族の名前と称号は奪われていた。その理由は彼らが地元の人々のためではなく、孫の世代に至るまでスパイをし、暗殺を行っていたからであった。私はショックを受けた」、2007年5月5日、トゥアランのプンフル（Penghulu= 地区長）、トゥアंक・ナイ・ロンアブドゥッラー・イブニ・トゥアंक・ナイ・ロン・ハジ・ヤシン（Tuanku Nai Long Abdullah ibni Tuanku Nai Long Hj Yassin）の投稿などである。

(2) シャム語話者とその未来についての話題

2007年7月10日の記事にコメントをよせたプンダン地区のクボール・パンジャン（Kubor Panjang）村の匿名氏はシャム語を話す自らの家族について、仏教徒との関わりはみつからなかった、と述べたあと「他のクダー・マレー人はこのシャム語を話す私たちに恥ずかしそうに見てはいけません。これは先祖がマレー族のシャム・イスラムの子孫であったためです。シャム語を話す人は少なくなっていて、今後ティティ・ハジイドリス（Titi Haji Idris）、トゥアラン、クボール・パンジャンなどでは若い世代がシャム語をつかわないので、絶滅するだろう」と述べた。

彼らがかつてサムサムと呼ばれている頃、一般のマレー語話者ムスリムにとって「シャム語」話者ムスリムにはあまり好ましくない評判があった。「敬虔ではないムスリム」と呼ばれていた上にチュア・ブンケン（Cheah Buun Kheng）によれば1930年代のクダーの内陸部で英領マラヤ警察は、国境を越えてくる牛泥棒や「ならずもの」の掃討に苦慮した。アワン・ポー（Awang Pho）やパングリマ・ナヤン（Panglima Nayan）など実在した人物は彼らもまたシャム語話者ムスリムであった。彼らは盗賊として逮捕処刑されたが、その一方で「マレーのロビンフッド」という「強きをくじき、弱気を助ける」という義賊のイメージがあったことも確かである。このとき、Cheah がインタビューによって情報収集した人々もまたサムサムであった [Cheah 1988]。

シャム語話者ムスリムがいなくなるかもしれない、という意見を受けて、「クダー州での使用がますます減っているシャム語のためになにか行動を起こすべきだと思う」という意見もでてきた。クダーでは日々目にする地名がマレー語起源ではないと思っている住民が多く、またマレー語のクダー方言というのも独特の癖がある。著者は言語研究者ではなく、またクダーの方言について音韻分析以上の説得力のある論文を見つけられなかったので、滅びつつある言語の研究者に是非分析していただきたいと思う。

(3) キジャン・マス（Kijang Mas）による厳しい意見

アナイアナイの歴史認識について、ブログ「Empayer Islam Benua Siam Kedah」では真っ向から反論するコメントはなかった。疑問をもつ人々は無視するか、立ち去ったのであろう。

2007年7月18日の Empayer Islam Benua Siam Kedah に投稿されたナイ・ロン・カシムの「Negara Thailand Asalnya Adalah Benua Siam Kedah」は「タイ国の起源は「シャム・イスラーム国家」クダーにある」という題名である。タイ南部パタニの問題に若干触れるが、5月27日のブログで始めて主張していた自らの祖父からの話に限られたクダーの歴史、シャム語を話すマレー人はシャム族であるという話しから遙かに逸脱し、おそらくはアナイアナイの影響をも受けて、アユタヤ朝はシャム語を話すイスラーム国家であるという確信の元、アユタヤの版図以上に

広大なシャム・イスラーム帝国について述べた [http://sejarahnagarakedah.blogspot.com/2007/04/negara-thailand-asalnya-adalah-benua.html 2018年6月25日閲覧]。

この記事とアナイアナイの書いたシャムイスラームアユタヤ王の系譜はパタニの紛争問題に興味をもっていた別のネットのフォーラムで「事実だろうか?」ととりあげられた。その中で、近年のパタニの紛争問題について著書を出版しているアメリカ在住のキジャン・マスの手厳しい意見が明らかにされた [http://arkib.al-fikrah.net/index.php?name=Forums&file=viewtopic&p=61878 2018年6月25日閲覧]。

「私は "Nagara Kedah Pasai Ma" のサイトを広く閲覧してきました。そして、私はそれがブログ主氏の厄介な妄想によってもたらされた偽りに完全に基づいていると断言することができます。彼の「物語」は、時代を誤った国や王の混乱したおとぎ話です。(中略) アユタヤは決してマレー帝国ではなかった。上層部には多くのイスラム教徒がいたが、それは仏教の王朝だった。そのウェブサイトの所有者は妄想的であり、マレーの歴史認識に大きなダメージを与えている。私は東南アジアの歴史(古代のシャム、カンボジア、チャンパ、パタニ、シュリーヴィジャヤ、ランカスカなど)の権威であると思っています。そのサイトの主張の100%が間違いや悪意のある捏造です。歴史は、隣接する王国による歴史的証拠の裏付けに基づいています。彼の主張は、地名や言葉の関連性の乱れ、時代の混乱を除いて、どこの歴史的な文書によっても確認することはできませんでした。オランダ人、フランス人、英国人、ペルシア人、ポルトガル人は、アユタヤとの取引について細心の注意を払っていました。世界最高の文書館と図書館を使える私の広範囲な研究から、私はアユタヤのマレー皇帝に言及するか、またはアユタヤはマレー帝国であったことを証明する史料を一度も見つかることはありません。そのサイトはまた、「シャム」と「タイ」が異なる人々であり、「マレー」と「タイ」の同義語が「タイ」の子孫であると主張した。再び、これは不合理な虚偽の表現です。シャム人は、タイ=カダイ語グループの一員です。「タイ」は、タイの名前を変更してシャムのすべての民族を取り込むために、1938年にピブン・ソクラーン将軍によって作られたものです。(中略) 私はこの著者アナイアナイ=A.M. Mazlan が某大学のスタッフであると信じています。歴史をねつ造するための彼一人の妄想的な探求が、その大学の不幸なマレー人学生に影響を及ぼす前に、何かが行われなければならない。彼の妄想を読む時間を無駄にしないことをお勧めします。」[Thailand asalnya daulah Islamiyyah? 2009年2月15日中の引用2008年11月3日の Kijang Mas のブログからの転載]

キジャン・マスが「シャム・イスラーム帝国」を一蹴したのは歴史研究者としては当然の態度であり、筆者もそれを支持する⁸。だが著者としては一部とはいえ人々がなぜこのような説を信じたがるのかその背景について興味がある。

IV. バーチャルからリアルの世界へ

1. 家族会 クルアルガ・ト・ナイ・ディン (Keluarga Tok Nai Din) と プルサトアン・シャリフ・アブ・バカル・シャー (Persatuan Syarif Abu Bakar Syah)

2007年5月22日にプルサトアン・シャリフ・アブ・バカル・シャー家族会が内務省に協会として登録された。シャリフ・アブ・バカル・シャー家族会は、自分たちはメロンマハーワンサ王の子孫の真の継承者であり、UUK が我々の主張の根拠であるとしていると宣言している。実

⁸ キジャンマスがオンラインで出版している *Patani: Behind The Accidental Border* はタイ深南部の旧パタニ王国領で起こっている問題についての良書である。キジャンマスはもちろん偽名であるが、パタニ問題については研究者が政治的にも微妙な立場に置かれる場合があり、亡命中の研究者もいることから彼は「シャム・イスラーム帝国のアユタヤ朝」などという「おとぎ話」を一蹴したのであろう。

態としてはこの家族会は2001年から活動していたようである。ナイ・ロン・カシムの母親シャリファ・ソフィア (Syarifah Sofea、あるいは Ceh Sophia) がスルタン・アブドゥル・ハミッド・ハリム・シャー II (1860-1943) と離婚した後、スルタンは1881年にタイのラーマ5世の娘マンジャレラ (Manjalara) と結婚したという⁹。

1981年にソフィアの父が死亡した後、一族は古代クダー王族 al-Jefri Merong Maha Wangsa の復活運動を続けて、2001年に第1回家族協議会を開催し、シャリファ・ソフィアが出席している [Brung Murai 2012/11/16]。これがそもそものメロンマハーワンサの一族ことシャリフ・アブ・バカル・シャー家族会の目的であった。

ナイ・ロン・カシムはもう一つの家族会に顧問として参加している。ト・ナイ・ディン家族会は1974年から存在し、祖先のト・ナイ・ディンはクダーがナコンシータマラート軍に攻撃占領された1821年に、コタムンクアンの戦いで亡くなった「英雄」と考えられている。この会の目的はト・ナイ・ディンの子孫の系譜をたどりつつ、その系譜につながる人々との親睦である。活動は非常に活発で、イスラームの行事や祭り、冠婚葬祭の時にメンバーはよく会合を開いた。クバンパス地区にあるト・ナイ・ディンの墓の周りの草刈りは毎年の行事である。さらに2006年からはブログを立ち上げて、さらに遠い地域まで子孫たちを探した結果、この家族会はマレーシア以外の世界各国にメンバーをひろげた。年一回の家族会大会はクダーでおこなわれるが800名もの参加者を集める大きな会合を開き、それが新聞サイトにも記載されるようになった。

彼らの伝承によれば、ト・ナイ・ディンの父ト・ナイ・シム (Tok Nai Shim) はクバンパスのラジャとして知られていた。タイの占領支配の後、クバンパス地区はトゥンク・アヌム (Tunku Anum) とその息子による統治を経験したが、それ以前はト・ナイ・シムが土地の支配者 Penghulu Besar (大首長) であったという。この一族の伝承ではクダースルタンから追放されたために一族はほとんどがクバンパスのホスバ (Hosba) 郡に住んでいる。そして彼らもまた「シャム語話者ムスリム」の一族である。この家族会にはナイ・ロン・カシムもしばしば顔をだしていた。

ただし、懸念すべき要素もある。この一族の提供する情報には彼らしか知り得ない貴重な地方史の情報もあるのだが、シャリフ・アブ・バカルの情報と関連して解釈されがちであり、ブログでは「シャム・イスラーム帝国」の实在論に傾いている。このような民間の団体が誤った歴史認識を広めてしまうと、世代を重ねてさらに誤った説を拡大しつづける可能性があり、困った結果を産んでいくかもしれない。

2. マレーシア歴史学会の見解

キジャンマスの警告に待つまでもなく、「シャム・イスラーム帝国」のような科学的論証に耐えられるべくもない奇説が、歴史に興味を持っているクダーの一般の人たちやト・ナイ・ディン家族会のような多数のメンバーを抱える家族会、二次引用のブログなどで流布していく状況は、歴史研究者やクダー州政府にとっても好ましくないのは言うまでも無い。

マレーシア歴史学会 (Persatuan Sejarah Malaysia) は1956年から活動している歴史や考古学研究の団体で *Malaysia sari segi Sejarah* などの定期刊行学術誌を発行しているほか、各地に支部をもっている。クダー支部 (Cawangan Negeri Kedah) においても、独自に *Kedah in History, Kedah dari segi sejarah : jurnal Persatuan Sejarah Malaysia Cawangan Kedah* などの学術誌を発行して論文や史料解説を提供し続けている。マレーシアの研究者がここから論文を引

⁹ スルタン・アブドゥル・ハミッド・ハリム・シャー II は8回結婚し、45人の子供がいた。またタイのラーマ5世も妻と側室で160人以上おり、子供は77名になった

用することも少なくない。

1章で述べたように、2007年11月1日マレーシア歴史学会クダラ支部（PSMCK）は「クダラの歴史：想像と現実の間（SEJARAH KEDAH Antara Imajinasi dan Realiti）」と題したフォーラムを開き、歴史学者ドクター・ハジ・ムハマッド・イサ・オスマン（Dr. Haji Mohd Isa Othman）准教授を議長に3人のパネルメンバー、ダト・ハジャ・シテイ・ハワ・サレー（Dato Hajah Siti Hawa Salleh）教授とナイ・ロン・カシム（Encik Nai long Kasim と表記）氏とダト・ドクター・ハジ・アディ・ハジ・タハ（Dato' Dr. Haji Adi Haji Taha）を招いた。題名が示すように話題になっているナイ・ロン・カシム氏にも「想像」の歴史観を発表する機会を与え、専門家に意見を聞くことができたのである。

そして、2009年8月29日に同学会は「スルタン・シャリフ・シャーの物語」と題する歴史フォーラムを開きハマリ・アサディによる論文「シャリフ・シャーの子孫：クダラにおける政治・社会経済への関与（Keturunan Syarif Syah: Pembabitan dalam Politik dan Socio-economi di Kedah Darul Aman）」を紹介した。そこには、ハマリ・アサディによるコタムンクアンでの聞き取り調査と研究によって、リゴール（ナコンシータマラート）からやってきたスルタン・シャリフ・シャー（アブ・バカル・シャー）の一団がコタムンクアンに築城してその地やトゥアランに住み着き、その後1821年のタイの攻撃によって一族の殆どが殺害されたことが述べられた。また、アユタヤ朝ではムスリム領主は17世紀のナコンシータマラート国主のプラヤー・ラーム・デチョー（Phraya Ram DecuあるいはPhraya RamDecho）の称号をもつムハマッド（Muhamad）とソクラーを支配したペルシャ系ムスリム、スルタンスレイマン（Sultan Sulaiman）の一族のみであると述べられた。論文では「シャム・イスラーム帝国」についてはなんら触れられていなかった。歴史学会はこれがリアルの世界におけるおそらくもっとも近い史実として提示できるもののみを公開したのである。

3. ナイ・ロン・カシムからタイ首相への手紙

だが、歴史フォーラムでの論議は却ってナイ・ロン・カシムを喜ばせたようであった。2011年9月3日に彼は以下のような英文の手紙を当時のタイの首相インラック・シナワットに出している。

「2011年9月3日

タイ首相閣下

マダム、インラック・シナワット

親愛なるマダム

シャム王ボロマラージャ V 世ことエーカタット王から1782年にチャクリー王朝のラーマー一世王プラ・プッタ・ヨット・ファー・チュラローク（Pra Putta Yot Fa Culalok：原文ママ）によって乗っ取られた半島シャム・マラッカのもとでの旧来のタイ国の南部諸国についての要求について

上記のように私トゥアंक・ナイ・ロン・カシム・イブニ・トゥアंक・ナイ・ロン・アフマッドは最後のシャムのムスリム・シャム王である、ボロマラージャ V 世ことエーカタット王の直系の子孫であります。

スコタイがシャムを侵略した1767年にボロマラージャ V 世ことエーカタット王はアユティアからナコンシータマラートに逃げました。ボロマラージャ V 世ことエーカタット王ことシャリフ・アブ・バカル・シャーは1767年の攻撃の時に死んだと誤って記録されておりますが、それはシャム国をタイの歴史に置けるムスリム王国として認める一章を抹消するためです。

タイの専門家による調査では、仏像で飾られる前のアユタヤの旧市街に21のモスクがあることがわかっております。

シャリフ・アブ・バカールがラジャ・バカール (Raja Bakar) としてナコンシータマラートで統治していることは、新しいスルタンたちやその他が任命されている『ヒカヤット・パタニ (Hikayat Patani: パタニ年代記)』の原稿に明らかに記されております。

(中略)

以前、スコータイは最初にビルマを侵略して征服し、その後シャムに侵入し、チェンマイを経由してアユティアを攻撃しました。欠陥のある将軍、タクシンが殺害された後、プラ・プッタ・ヨット・ファー・チュラロックである、ビルマの大臣の息子は自らをラーマ1世として知られるシャムの第1王と宣言しました。

シャムの王はムスリム (Moslem) であり、シャムの侵略者のスコータイは上座仏教徒であることに留意されたい。

マレー語の史料では、『ケダー法令集 (Undang Undang Kedah)』の43頁と131ページによればボロマラージャ V 世ことエーカタット王は、またはシャリフ・ヤン・ディ・プルトゥアン (Syarif Yang Di Pertuan) として知られていました。この古いジャウィー文字のテキスト史料は、ロンドンの東洋アフリカ研究学院 (SOAS) に保存されていましたが、2004年にマレーシアに戻り、2005年に出版された。この原稿では、証拠がより明確であります。

シャムの元王が1821年1月12日にまだ生きていることを知った時、新チャクリー王ラーマ2世は、彼の兵士にボロマラージャ V 世を待ち伏せさせて、新宮殿のあるクダーのジトラのコタムンクアンで王と王妃を殺させましたが、彼らの子孫は彼の息子ポーチャン (Po Chan) によって受け継がれ、ポーチャンがペラを統治した時より続いています。以前、ポーチャンはカンボジアを統治していましたが、タイ軍によって追放されました。

この証拠は、2009年8月20日にクダーのアロースターで開催されたマレーシアのマレーシア歴史学会、クダー支部のフォーラムで記録され、「スルタンシャリフ・シャーの物語 (Cetera Sultan Syarif Syah)」と名づけられました。

1836年にモンクット (誤りであるが年と名前原文ママ)、はシャムの新しい名前をタイ国として宣言しましたが、彼自身はシャムを侵略した者であるスコータイ (Sukho-thai) 人です。モンクットは英国人ひいきであるため、英国人がシャム・マラッカ半島の名前をマレー半島 (Semenanjung Tanah Melayu、したがって Malaya) に変更し、「Melayu」またはマレー人と呼ばれる新しい民族を創り出したときそれに便乗しました。初期の植民地主義者による地図、ポルトガル人とオランダ人は、シャム・マラッカ半島と記しています。

(中略)

私は、独立が得られ、南部州にシャムの真実かつ適切な歴史が明らかにされれば、タイの平和な南部州が見越されると思います。

私は、ケダーのイスラム教徒のシャム王ボロマラージャ V 世ことエーカタット王、シャリフ・シャー・アブ・バカール・シャーの直系の子孫として、私はラーマ9世王陛下とタイ政府に人権法の下で私の権利と補償を主張しますので私に然るべきものを返していただきたい。

私は、この問題が、今日の新千年において不相当と判断されることを避け、適切な議論と真のアセアン精神で解決できることを心から願っています。

あなたの誠実なる

(サイン)

YM Tunku Nai Long Kasim ibni NaiLong Ahmad

(個人住所)

Kedah Darulaman

Cc. 1. The King of Thailand

2. The Prime Minister of Malaysia
3. Secretary General United Nations
4. Secretary General ASEAN
5. Director Human Rights, ASEAN」 [Burung Murai 2007/11/1]

(署名以下はあえて原文ママ)

手紙を受け取った側ではさぞ困惑したであろう。トゥンク・ナイ・ロン・カシムがタイ首相に手紙を送ったのは9度目であった。

タイのインラック首相に、ただのナイ・ロン・カシムではなく、YM Tunku Nai Long Kasim ibni NaiLong Ahmad と称号をつけて名乗る彼は2009年8月のクダマレーシア歴史学会のフォーラムで「シャム・イスラーム帝国」が否定されたとは考えなかった。

4. ナイ・ロン・カシムの死とその後

(1) ナイ・ロン・カシムの死

2012年5月25日にナイ・ロン・カシムは亡くなった。74才であった。その年の1月に100才になる彼の母も物故していた。彼の死の知らせは、電話の他、サイト「KedehCyberSyburi」において「メロン・マハーワンサー族」に伝えられた。5ヶ月後の追悼文によれば、ナイ・ロン・カシムは農業分野で成功した実業家であった。

ナイ・ロン・カシムの死の後も、彼とアナニアナイが主張しつづける「シャム・イスラーム帝国」についての記事は二次引用され続けた。Empayer Islam Benua Siam Kedah のブログは2013年に更新が止まったままだが、2014年にはプルサトアン・シャリフ・アブ・バカル・シャー家族会が違法な高価なメダルの販売に関与したとして、マレーシア内務省 (KDN) が調査に入るというニュースが流れた。KDNによると「この協会は、設立目的と矛盾する活動を行っているという主張があり、組織が違法行為に関与しているという十分な証拠があれば、協会に対して訴訟が起こる。」ということである。その後の詳細はみつからないが、おそらく、家族会の核となってきたナイ・ロン・カシムとその母ソフィアの死によって、リアルな家族会の活動としての求心力が衰えたところに、違法行為をする何者かが入りこんだものであろうと推察する。

(2) Wikipedia への登録

「Syarif Abu Bakar Shah」の項目がマレー語版の Wikipedia に登録されたのは2016年10月12日の14時45分である。登録したのはハンドルネーム FaiqIQ で、それに Alexander Iskandar による改訂を重ねて2018年11月現在も閲覧可能である。内容の冒頭は以下のように書かれている。

「シャム・イスラームのアユタヤ王国の33代目の最後の王である (以下略)」

もし学生がこの情報をソースにしてレポートを書いてきたら、著者は落第点をつけるであろう。しかし、この歴史の基本情報の誤りを笑っても居られない状況は進行中である。

(3) ドキュメンタリーになった「コタムンクアンの歴史」

2018年7月6日に YouTube.com [https://youtu.be/1V0DnqZi7wY]、そして2018年7月22日にクダマレーシアの地方 TV サイトの Sintok TV 「コタムンクアンの歴史ドキュメント (Dokumentari Sejarah Kampengkuang)」と題する8分42秒の映像が公開された [http://sintoktv.com/documentary/video/496?start=9 2018年9月29日閲覧]、[https://youtu.be/1V0DnqZi7wY 2018年9月29日閲覧]。この映像は「最終学年の学生が学士号を取得し、優秀なメディア技術を学ぶ SCCT 3996 Year-End Projects プロジェクトを遂行することを学ぶ目的で制作されています。またマレーシアのマレーシア北部大学 (Universiti Utara) でメディアテクノロジープログラムとマルチメディアコミュニケーションテクノロジースクールと共同で出版されています。」と説明されており、マレーシア北部大学 (Universiti Utara Malaysia)」の教育の一環でもある。

コタムンクアンの村人に取材し、ナレーションを加えたものだが、かつてコタムンクアンの歴史を紹介したもう一つの映像「コタムンクアンの歴史（2008年7月23日公開）[<https://youtu.be/pRj9cEWAzzY>]」に比べると、村人には取材慣れとでも言うべき、あるいは既にネットで広まったコタムンクアンの伝承についての情報を知っていると思われる点がかげがえること、また、ナレーションでは「コタムンクアンのアブ・バカール・シャーはスコタイの軍隊に追われて」というナイ・ロン・カシムの誤った説をそのまま述べている。これが2018年現在のクダーにおけるコタムンクアンについての定説になっていると考えられる。

著者はこのように疑問のある「伝承」が映像などで「固定化」することを憂慮するものであるが、最後の章で、なぜこれがトゥンクナイ・ロン・カシムやアナニアナイ=A.M. Mazlan に書かれ、また人々の支持を受けるのかその背景を考察したい。

V. 考察

1. クダーにおける「シャム語」話者

マレーシアのクダー州はマレー人が多数派を占める。近年のセンサスにおいては民族も宗教も77%がマレー人ムスリムである。そして、マレー人＝マレー語話者と考えるのが普通である。

その一方で地名の多くがシャム語起源らしいこと、ムスリムとは別にシャム人仏教徒集落が点在していることも住民は知っている。筆者の2004-2007年にかけての上座仏教寺院調査ではシャム人上座仏教徒寺院はマレーシアの中でクダー州がもっとも多く42を数えた。シャム人仏教徒は近年の移住者ではなく、寺の中には数百年の歴史を持つと伝えられているものが複数ある。彼らもまたマレー人と同じく「ブミプトラ」として先住民と認められている[黒田 2010]。

その中で、人々は「なぜ、クダーにはシャム語話者がいるのか?」「シャム人（仏教徒）が居るのはなぜか」という素朴な疑問を持ってきた。ネットのフォーラムにもその疑問をテーマにしたスレッドがマレーシア、タイの双方でも見ることが出来る。

その中でクダーにおける「シャム語話者」の立場を考える。

本稿で述べたコタムンクアンの主は「シャム語」話者ムスリム一族であった。そして情報提供者もナイ・ロン・カシムやその周りのコメンテーターも「シャム語」話者である。

「シャム語」話者ムスリムがどのような立場にあるのかは、「私たちはシャム語を話すことを恥ずかしかってはいけません」というブログのコメントが象徴的している。マレー人でムスリムならばマレー語話者が当然とされる世界では日常語がマレー語でないことは「恥ずかしい」と感じられることがあるのだろう。また、自分自身はもはやシャム語が話せないとしても、家族や祖先が「シャム語」を使っていたということも、他者からは、タイからの移住者として否定的にとらえられているのかもしれない。

2. 歴史に登場しない「シャム語」話者

アナニアナイが「植民地主義者による歴史ではなく自らの歴史を」と主張することには二重の意味が見て取れる。

一つは、クダーを「植民地」状態においたタイと、クダーのスルタン・アブドゥル・ハミッド・ハリム・シャーIIに対する不快感である。このスルタンの治世中の1909年の英シャム条約(Anglo-Siam Treaty)でシャム中央政府と英国との間で頭ごなしに近代国境が設定され、以後は英領マラヤとしての植民地支配をうけたことへ不満である。「私たち自身の歴史が欲しい」というクダーの人々の声を代弁しているとも言える。

もう一つはその両者の描く歴史にはシャム語話者ムスリムはどこにも登場しない、という失望が見て取れる。つまり「シャム語話者ムスリム」という存在は歴史の主役にも脇役にもどこにも

認められないままなのである¹⁰。

クダーのムスリム達にとっても身近な南タイ深南部のパタニ王国地域を巡る紛争の問題はそれと対比的である。旧パタニ王国においてはパタニは過去も現在もマレー語話者ムスリム社会で、それが上記の国境条約で政治的な意味でシャム（タイ）領に残留したため、その後のタイの近代化政策の中で、タイの仏教徒的価値観とタイ語教育とタイらしさ（Thainess）への強要が、人々の不満となり、爆発し、ある意味タイに対するムスリムとして当然の抵抗としての今日がある。

しかし、クダーの場合はどうか。サムサムと呼ばれた時代からシャム語話者としての引け目を感じつつも、クダー人としてジャウイー文字で書かれたマレー語の UUK や HMMW という史料に自らのルーツ（タイ語を翻音したとみられる称号）を見いだして、それが壮大な「シャムイスラム帝国」を主張するに至った、ねじれも見える。

「シャム語はそのうち絶滅するでしょう」「いまのうちに何とかしないとイケません」というコメントも自らのアイデンティティに関わる一つの要素としての「シャム語」の減少に対する現実の危機感ではないのか。

おわりに

イスラームについて異論を唱えることができない世界では、かつてはよりイスラーム実践に励むことが社会の一員として認められる証明であった。それが90年代のダクワ運動の広がりである。しかし、その流れとは別にクダーに古くから住んでいる人間としての土地の民として、「シャム語」話者ムスリムはマジョリティの中のマイノリティである。しかも「シャム語」話者は世代が進むに従って減ってきている。

その中で、「クダーにきてコタムンクアンに城を作って住み着いたシャム語話者のスルタン」とは地域の「シャム語」話者たちにとって自分達も歴史の中の偉人の一人の子孫であるという自信を与えてくれるものであるのではないだろうか。その一方で嘗ての移住元であるナコンシータマラート周辺のパタルンやソンクララーといった、南タイ語方言を話すムスリムたちとは疎遠になりつつあるように感じるが、それはまたタイ側現地についての人々の歴史認識調査が必要であろう。

参考文献：

(1) 日本語文献

会津 泉、2001.『アジアからのネット革命』、岩波書店、東京。

黒田 景子、1995「サムサムとシャム人：ケダーにおける Thai-speaker 小史」、『南方文化』、第22輯、44-61。

黒田 景子、2010-2011「クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から(1)-(4)」『人文学科論集』鹿児島大学法文学部紀要71-74号。

黒田 景子、2019.「コタムンクアンのシャリフ・アブ・バカール・シャーとシャム語話者の世界 - マレー半島中部の口承伝承とその可能性」『南方文化』第45輯。

¹⁰ タイは全住民の95%が仏教徒であるが、南タイは歴史的に比較的ムスリムの多い地域で、マレー語ムスリムの国である旧パタニ王国に当たるパタニ県、ヤラー県、ナラティワート県では住民の80%以上がマレー語話者ムスリムである。しかし旧クダー領である Satun (Setul) 県とその他のナコンシータマラート以南の南部諸県ではムスリムは10%ほど存在し、タイ語教育を受け入れているため、言葉はタイ語が主である。クダーの人々はよく国境を越えて冠婚葬祭に行くが、それは国境を越えたサイブリー街道上の Patong Karam などの地域が旧クダー領であったためである。

(2) マレー語文献

Adi Yasran A A, Mohamad Zaid M Z, Hashim M, Halimah H, Mohd Sharifudin Y, Syed Nurulakla S.A, Nurhidayah J, Ahamad Asmadi S., 2012. "Undang-Undang Kedah:A Law Canon of an early Malaystate, in *Advances in Natural and Applied Sciences*, 6 (3)、459-466.

Hamli Asadi 2009. *Keturunan Syarif Syah: Pembabitan dalam Politik dan Socuo-economi di Kedah Darul Aman*, Forum; Ceritera Sultan Syarif Syah anjuran: Persatuan Sejarah Malaysia Cawangan Kedah di Dewan Theatre Muzium Negari Kedah, Alorster.

Mariam Salim, 2005. *Undang-Undang Kedah*, Desan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur.

(3) タイ語文献

Krom Sinlapakon, 1963. *Ruang Tang Cao phrayaa Nakhonsiithammaraat: Prachum phongsawadaan vol.73* (『ナコンシータマラート国主の任命』史料集成 No.73)、Bangkok. (タイ語)

Mai prakot (著者不詳)、1983 (復刻版) *Tamnan Phraham Nakhon si thammarat*, Sun Wathana PhakThai Withayarai Si Nakhon ThammaRat, 34pp.

(4) 英語文献

Bonney, Rollin, 1971. *Kedah 1771-1821*, Oxford University Press, Kuala Lumpur.

Chuah Bun Kheng, 1988. *Peasant Robber of Kedah: Historical and Folk Perceptions*, Oxford Univ.Press, Singapore.

Gullick, J.M.1983. "Kedah 1821-1855:Years of Exile and Return", *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society* Vol. 56, No. 2 (245)、31-86.

Kuroda Keiko, 1992 "The Samsams of Kubang Pasu-the Historical Relations between Kedah and Siam Viewed from a "Kampung" in *Local Societies jn Malaysia vol.1.*, ILCAA, Tokyo, 89-109

Stuart. Munro-Hay, 2001. *NakhonSri Thammarat: The Archeology, History and Legands of a Southern Thai Town*, White Lotus, Bangkok.

Winsted, R.O., 1928." Kedah Laws" in *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, Vol.6, No.2 (103)、Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society、1-44.

Winsted, R.O., 1938. "THE Kedah Annals" in *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, Vol6, No.2 (103)、Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society、Vol.16、No.2 (131) .31-35

(5) Web サイト (マレー語) 史料

a.atok fabregas

<https://atokfabregas.wordpress.com/2011/11/27/sultan-syarif-syah/> 2018/6/25閲覧

b.Blog naim_firdausi (<http://ttuyup.wordpress.com/2007/03/09/misteri-kota-kota-yang-hilang-kota-mengkuang/>2007年10月20日閲覧、2018年には閉鎖で閲覧不可能、ただし、Blog naim_firdausi は <http://firdausi54.rssing.com/chan-6056211/latest.php> に移転復活している2018/10/31閲覧

c.Berkat Ayahnda

<http://berkatayahnda.blogspot.com/2017/07/yang-di-pertuan-agong-ydpa-bergelar.html> 2018/6/25閲覧

Burung Murai

<http://burungapa.blogspot.com/2007/11/sejarah-kedah-antara-imaginasi-dan.html> 2018/6/30 閲覧
Cominity Forums -al-Fikrah.net

<http://themalaypress.blogspot.com/2008/10/paduka-seri-sultan-ahmad-tajuddin-bukan.html>
2018/6/30/ 閲覧

Empayer Islam Benua Siam Kedah

<http://sejarahnagarakedah.blogspot.com.html> 2018/6/25～2018/10/30まで複数回閲覧

Kedah Cyber Syber Kota Star Gate

<http://kedahcybersyberi.blogspot.com/2012/11/tuanku-nai-long-zaki.html> 2018/10/1 閲覧

keluarga tok nai din

<http://toknaindin.blogspot.com/2014/12/tok-nai-din-dan-ym-syarif-abu-bakar-shah.html>
2018/6/25 閲覧

Melayu Nusantara Menbongkar kehebatan Tamadun melayu

<http://lokalgenius.blogspot.com/2010/08/kedah-bukan-melayu.html> 2018/6/30 閲覧

Minda Ahad

<http://changlunhamradio.blogspot.com/search?q=kota+Mengkuang> 2018/6/28 閲覧
orang kedah

<https://www.orangkedah.com/menjejak-tinggalan-sejarah-di-pendang-kedah.html> 2018/6/25 閲覧

Persatuan Sejarah Malaysia

<http://www.psm.org.my/index.php/aktiviti/penerbitan/penerbitan-psm>
sangtawal

<http://sangtawal.blogspot.com/2009/03/hikayat-sangtawal-12-patani-bangkit-bhg.html>
2018/6/30 閲覧

Sejarah realiti Silat Cekak

<http://sejarahrealitisilatcekak.blogspot.com/2011/12/panglima-kerajaan-perlis.html> 2018/6/30

THEMALAYPRESS

<http://themalaypress.blogspot.com/2011/05/ayuthia-adalah-kerajaan-islam-melayu.html> 2016/7/4
閲覧

Radio Amatur Changlong

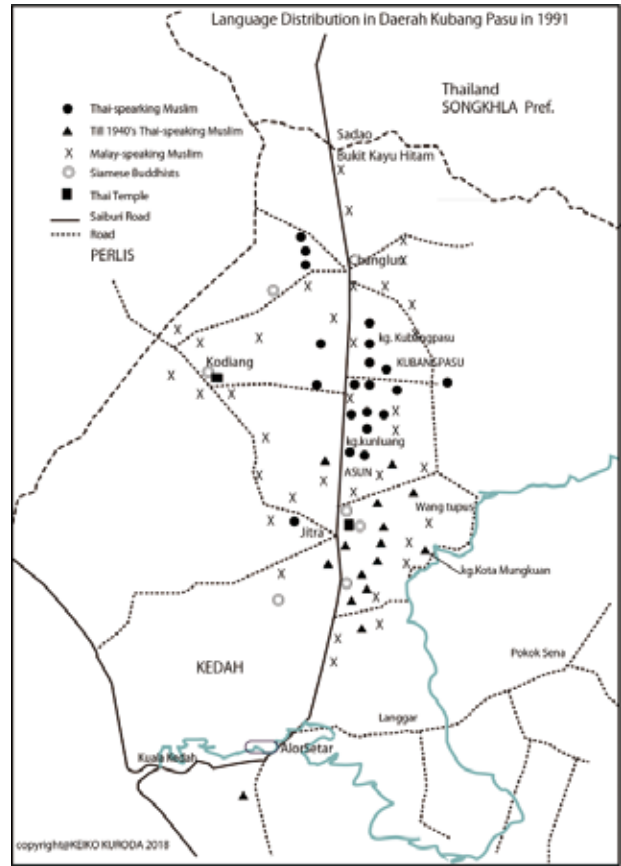
<http://changlunhamradio.blogspot.com/search?q=kota+Mengkuang> 2018/6/15 閲覧

Utusan Online

http://ww1.utusan.com.my/utusan/info.asp?y=2007&dt=0213&pub=utusan_malaysia&sec=forum&pg=fo_03.htm&arc=hive : 2018/6/25/ 閲覧

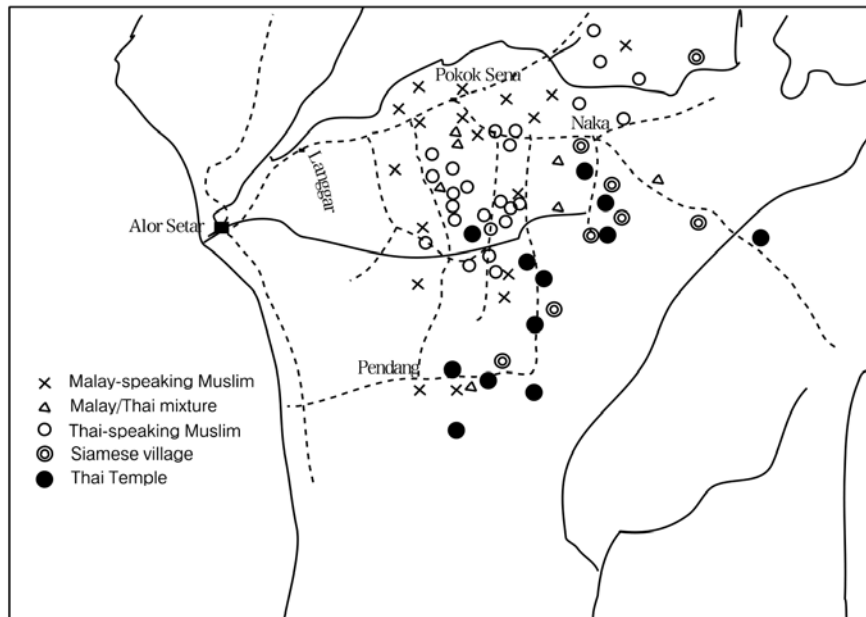


Map1. マレー半島中部図



Map2. クダー北部クバンパス郡のシャム語話者ムスリム村落分布 (1991)

Language Distribution in Pendang and AlorSetar



Map3. クダー中部プندان郡のシャム語話者ムスリム分布 (1991)

Abstract

Transfiguration of discourses over the Lord of Kota Mengkuang;
private consciousness of history in the oral tradition of Malaysia

Keywords :

Malaysia, Oral History, Kedah, Siam

There is a missing part in the history of Kedah in Malaysia. It is information from the village's gaze. However, historical informations from these villages may be left as naratives and oral traditions.

In recent years in Kedah, Malay Muslims have a move to publish them to the Malay language blog to leave history informations on their ancestral tombs and villages. Especially when the Thai army attacked Kedah (1821-1842) , many of them were handed down in the villages of Kedah as a time of pagan troubles and resistance of the Muslim era.

In this paper, we examine the tradition of Kota Mengkuang village and consider the meaning of the transformation of the discourse.

This tradition was a group of Malay Muslim royalty who had escaped warfare from South Thailand built the village and stayed there, but the family was almost killed by the Thai army's attack in 1821.

It is the direct descendant of the royal family that conveys this tradition. According to it, the King of Malay Muslim has the title of Thai of King Nakhon Si Thammarat. Also they were speaking a language similar to the southern Thai dialect of the Thai language they call "Siamese" instead of Malay.

Malay Muslim who speaks Malay in Kedah is overwhelmingly land, but there are many place names originating from "Siamese". In fact there are a small number of villages whose Siamese as everyday language, and they tell the long history relationship between Kedah and Thai (Siam) .

However, when this tradition was made public on the net, enthusiastic supporters appeared, with their own interpretation that the Ayutthaya dynasty was actually the Islamic dynasty, the area was from a part of India to Melaka of the Malay Peninsula, and From a part of Burma to the Philippines. The Supporters made it the "scientifically unlikely mysteries", and became to believe it. Some people to support it has been used on the Internet one after another. The Malaysian Historical Society distanced itself from the "Kedah Law" and "Hikayat Meng Mahawangsa Story", which are the historical materials that the information provider who opens the history forum and interpretation of its own makes. These materials have not been studied yet and must be handled carefully. Moreover, although I made a presentation about the "Siamese" speaker Muslim King of the "Lord of Kota Mengkuang", he is still "Ayutthaya The last king in the morning has escaped to Kedah and has its descendants Ayutthaya In the morning the Islamic Empire It was until the discourse that it was "to ride Wikipedia.

Considering why such explanations are enthusiastically supported, the region's Muslims from South Thailand to Kedah, which historically talked about Siamese, were transferred to British Malaya in 1909, so that Siamese-speaking Muslim became a minority among a large population

of Malay-speaking Muslims in Kedah. And in the past, and as they once were called Samsam from others and experienced as "not pious Muslim", they are shamefully talking about Siamese in Malay speakers Muslims, or they feel a sense of sharp identity We are seeing the current situation in crisis. Lord Syarif Abu Bakar Shah of Kota Mengkuang has become a theory without being verified as a mistake for "Siamese" speakers who will not appear in Kedah's history book as proof of their "own history".